



Title	メタフュシカ 第42号 彙報
Author(s)	
Citation	メタフュシカ. 2011, 42, p. 171-175
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/23302
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

【彙報】

○ 哲学哲学史・現代思想文化学

現在、学部の哲学・思想文化学には32名が在籍しています。大学院の哲学哲学史博士前期課程には8名、同後期課程には7名が、大学院の現代思想文化学博士前期課程には7名、同後期課程には4名が在籍しています。また、日本学術振興会特別研究員（PD）1名が在籍しています。上野修教授、入江幸男教授、舟場保之准教授、および須藤訓任教授、望月太郎教授、中村征樹准教授、入谷秀一助教の各教員が、臨床哲学所属の教員と連携しつつ、学生の教育・研究指導にあたっています。

本年度の講義・演習は、「ラカンを読む」「デカルトとスピノザ——現実性をめぐって」「スピノザ『エチカ』を読むⅨ,Ⅹ」「ドゥルーズのライブニッツ論を読む」「出来事的时间」（以上、上野教授）、「Discussing Brandom's "Making It Explicit" (1),(2)」「論理学中级 (1),(2)」「問答の観点から指示・推論・言語行為を分析する」（以上、入江教授）、「カント『実践理性批判』を読むⅠ,Ⅱ」「ドイツ哲学基本文献講読Ⅰ,Ⅱ」「J. ハーバーマスの思想Ⅴ」「哲学史におけるカント（概論）」（以上、舟場准教授）、「ショーペンハウアーの思想 (3),(4)」「ニーチェの歴史思想 (8),(9)」「現代哲学史概説」（以上、須藤教授）、「オルターグローバリゼーションの思想」「生存権の思想」（以上、望月教授）、「現代科学を読み解く」「科学人類学入門」「先端科学技術と社会 (3)」（以上、中村准教授）、「Writing Humanities Papers in EnglishⅠ,Ⅱ」（望月教授・中村准教授）、「アドルノ・ホルクハイマー『啓蒙の弁証法を読む』」（入谷助教）という題目で行われています。また、その他に、修士論文・博士論文作成のための演習が定期的に行われ、活発な研究・討論が行われています。

また非常勤講師としては、品川哲彦教授（関西大学）に「正義の概念と基本思想」、Michel DALISSIER 准教授（同志社大学）に「Bergson et Nishida（ベルクソンと西田）」という題目で講義していただいています。

HP (<http://www.let.osaka-u.ac.jp/philosophy>) ならびに You Tube にウェブ局「ヴィデオ・メタフィシカ」を開設し、研究室の活動状況などを公開しています。また海外に研究成果を発信するために、欧文機関紙 *Philosophia OSAKA* を刊行しています。

哲学哲学史・現代思想文化学の研究会として、*handai metaphysica* を開催しています。研究例会としては、2011年3月18日に田中悠介院生（博士後期課程）に「シルヴァン・フランコット、『ベルクソン：持続と道徳』」、原田淳平院生（博士後期課程）に「いつ『証拠超越性』は有害ではないのか：クリスピン・ライトへの応答」、野々村梓院生（博士後期課程）に「デカルトの物質的事物の存在証明について——『哲学原理』の証明は「第六省察」よりも妥当な証明か」、平野一比古院生（博士後期課程）に「ベルクソンにおける時間の側面について——時間が「働く」ということおよび自由——」という題目で講演していただきました。いずれにおいても活発な質疑応答がなされました。

第三回哲学ワークショップ（テーマ「何が平和の実現を促進するのか？」、他）が2011年1月10日に、第四回哲学ワークショップ（テーマ「事実と価値の二分法は崩壊するのか」、他）が同年3月16日に、第五回哲学ワークショップ（テーマ「何が平和の実現を促進するのか？」、他）が同年8月2日に、それぞれ開催されました。

新入生歓迎イベント「哲学のお題セミナー」が2011年4月21日に、「世界哲学の日記念セミナー」(『スピノザ』を読む)が同年11月17日に、それぞれ開催されました。

上野教授が月刊雑誌『本』(講談社)にて、「様相の十七世紀——哲学史のワンダーランド」の連載をされています。

上野教授が主宰する「近現代哲学の虚軸としてのスピノザ」(科研基盤研究(B))の第二回研究会「ライブニッツとスピノザ、18世紀へ」が2011年3月5、6日(大阪大学)に、第三回研究会「ドイツ古典哲学におけるスピノザ問題」が同年7月16日(大阪大学)に開催されました。

上野教授が関西哲学会第64回大会(2011年10月15日、龍谷大学)で、「スピノザ『エチカ』の「定義」」という題目で研究発表を、また第4回ICU哲学研究会(2011年11月23日、国際基督教大学)で、「Okay, I'll be Part of This World——可能な世界とスピノザの自由」という題目で基調講演を行いました。

上野教授の著書『デカルト、ホッブズ、スピノザ 哲学する十七世紀』(講談社)が2011年10月に刊行されました。

舟場准教授が5. Deutsch-japanisches Ethik-Kolloquium(2011年8月26日、Europazentrum der Waseda-Universität, Bonn, GERMANY)で、Zum Kongress als einer willkürlichen, zu aller Zeit auflöslichen Zusammentretungという題目で、また「<9.11>を多角的に考える哲学フォーラム」(同年9月10日、首都大学東京秋葉原サテライトキャンパス)で、「ある会議の可能性に向けて」という題目で講演を行いました。

須藤教授がハイデガー・フォーラム第六回大会(2011年9月18日、龍谷大学)で、「正義について——ニーチェとハイデガー」という題目で講演を、また科研基盤研究(C)「ヨーロッパの文学・思想継承における歪曲の系譜」(研究代表:古澤ゆう子)の課題研究の一環として、「「力への意志」——エリーザベト・ニーチェの場合」(2011年11月2日、一橋大学)という題目で口頭発表を行いました。

須藤教授の著書『ニーチェの歴史思想——物語・発生史・系譜学——』(大阪大学出版会)が2011年12月に刊行されました。

望月教授がEthics and Climate Change: Energy Ethics after Fukushima (29-31 August 2011, UNESCO-Bangkok, Thailand)で、Ethics of Disaster Recovery after the Devastating Earthquake and Tsunami in Northeast Japan(同年8月29日)という題目で口頭発表を行いました。

中村准教授が国際科学社会論学会年会(2011年11月2-5日、クリーブランド)で「Rethinking Science Communication in Japan after 3.11」と題して、また、大阪大学歴史教育研究会第55回例会(同年11月19日、大阪大学)で「科学技術史から読み解く世界史」、大阪府立三国丘高校三国丘カレッジ(同年9月25日)で「科学技術と現代社会」と題してそれぞれ講演を行いました。また、論考「科学技術コミュニケーションの政策的振興」が桑原雅子・川野祐二編『[新通史]日本の科学技術』第3巻(原書房、2011年10月)に掲載されました。

入谷助教がシンポジウム「諸文化の境界における哲学像」(ウラジオストク極東技術大学)で、「何が『君自身について物語れ』と命じるのか——自伝、伝記、そして生政治——」(2011年5月27日)、「日本の哲学と哲学教育について」(同月28日)という題目で、また最先端ときめき推進事業「バイオサイエンスの時代における人間の未来」第26回ときめき☆セミナー(2011年12月13日)で、「アドルノとは誰か——ビオグラフィーのビオポリティーク」という題目で講演を行いました。

入谷助教が共著者となっている『新しい時代をひらく 教養と社会』（角川学芸出版）が2011年12月に刊行されました。

多田雅彦院長が共著者となっている『ドゥルーズ 千の文学』（せりか書房）が2011年1月に刊行されました。

（入谷）

○ 臨床哲学

本年度の当研究室の在籍者は、学部生が26名、大学院生が25名（前期課程14名、後期課程11名）である。中岡成文教授、浜渦辰二教授、本間直樹准教授（兼任）、大北全俊助教の各教員スタッフが、哲学哲学史・現代思想文化学の教員と連携しつつ、教育・研究活動に従事している。

本年度は非常勤講師として、小林傳司教授（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）に「知識生産の論理と倫理」、家高洋招へい研究員（大阪大学大学院文学研究科）に「レヴィナスを読む」、久保田徹特任准教授（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター）に本間直樹准教授と共同で「思考の活動とメディア」を担当していただいた。

2011年3月に研究室の雑誌『臨床哲学』第12号を昨年度と同様にweb上で刊行した。英文2編を含む論文5編、活動報告1編、研究ノート1編で構成されている。また、5年ぶりに『臨床哲学のメチエ』17号を復刊した。倫理学専修の学部生を中心に復刊の希望が内発的に出され、同じく学部生を中心に自主的に作業が進められ復刊された。これは主に「外国にルーツをもつ人々との対話の試み」と「洛星高校プロジェクト2011」の二つの特集によって構成されている。

本年度より臨床哲学研究会を季節ごとに定期的で開催することにした。まずそのはじめとして2011年4月9日に「第24回臨床哲学研究会」を開催した。助教の大北全俊が個人研究発表「HIV感染症をめぐる臨床哲学的考察」、そして昨年度刊行した『ドキュメント臨床哲学』の合評会を評者に奥田太郎（南山大学准教授）・菊地建至（関西大学非常勤講師）・三浦隆宏（摂南大学非常勤講師）・森本誠一（本研究室博士課程後期）の諸氏を招いて行った。引き続き2011年7月9日に「第25回臨床哲学研究会」を開催した。本研究室博士課程後期在籍の中西チヨキが個人研究発表「病と看護と語ること聴くこと」、そしてシンポジウム「高校での臨床哲学の試み——過去・現在・未来——」を発表者に樫本直樹（大阪大学招へい教員）・會澤久仁子（熊本大学COEリサーチ・アソシエイト）・紀平知樹（兵庫医療大学准教授）・藤本啓子（須磨友が丘高校非常勤講師）の諸氏を招き、また中川雅道（早稲田摂陵中学・高等学校講師、本研究室博士課程後期在籍）をはじめ現在洛星高校で授業を実施しているグループによるワークショップを交えて開催した。2011年10月22日に「第26回臨床哲学研究会」を、3題の個人研究発表によって行った。准教授の本間直樹と博士課程前期在籍の辻明典が「南相馬と臨床哲学」、博士課程後期在籍の東暁雄が「手続的正義と規範としての法」、同じく博士課程後期在籍の森本誠一が「市民参加型社会へ向けた公衆関与のあり方について」を発表した。またそれぞれに外部より特定質問者として本間・辻の発表に対して青田由希雄（名古屋大学大学院生）・菊地建至（関西大学非常勤講師）、東の発表に対して川島惟（大阪大学特任研究員）、森本の発表に対して山内保典（大阪大学コミュニケーションデザイン・センター特任研究員）の諸氏を招いた。2012年1月14日に「第27回臨床哲学研究会」を「ケアの臨床哲学研究会」「患者のウェルリビングを考える会」「〈ケア〉を考える会」と共催で開催した。シンポジウム「高齢社会におけるケアを考える」と題してそれぞれの研究会の代表で

ある浜渦辰二、藤本啓子、林道也の諸氏を発表者に招いて行った。この回のみ大阪大学中之島センターにて開催し、それ以外は大阪大学豊中キャンパス大学教育実践センター・スチューデントコモンズにて開催した。

2011年8月4日、元臨床哲学研究室教授で前総長の鷺田清一が総長を退任するにあたり、文学研究科と共催で「鷺田総長最終講義「大学と人文学」」を大阪大学会館講堂にて開催した。大阪大学前理事をはじめ、各部局長、名誉教授、文学研究科内の教員及び職員、学生、そして一般から多くの参加があり盛会だった。

中岡成文教授が2011年5月に刊行された『応用哲学を学ぶ人のために』（戸田山和久・出口康夫編、世界思想社）で「臨床哲学」を執筆した。また、2011年11月17日に、第43回大阪大学21世紀懐徳堂講座「ここから拓く未来」で「復興する」ために——臨床哲学から」と題して講演を行った。

浜渦辰二教授が代表をしている「ケアの臨床哲学」研究会が主催するシンポジウムが2010年4月（シンポジウム「高齢社会における終末期医療を考える」）と2010年8月（シンポジウム「高齢社会におけるホスピスを考える」）、2011年1月（シンポジウム「高齢社会における施設での看取りを考える」）、2011年3月（シンポジウム「終末期ケアと死生観」）、2011年5月（シンポジウム「高齢社会における人工栄養を考える」）、2011年8月（シンポジウム「高齢社会における認知症のターミナルを考える」）に開催された（場所は2011年8月のシンポジウムのみ大阪大学会館にて、それ以外はいずれも大阪大学中之島センターにて開催）。また、同じく浜渦辰二教授が代表をしている科研「北欧ケアの実地調査に基づく理論的基礎と哲学的背景の研究」の研究会として、本年度では2011年7月に第5回、10月に第6回、12月に第7回が開催されている。

浜渦辰二教授が2011年10月30日に第64回関西倫理学会大会のシンポジウム「直観と倫理」にてシンポジストとして参加した。また、2011年11月3日に、第34回静岡大学哲学学会のシンポジウムにて「応用現象学とケア論～北欧現象学との交流のなかから」という提題を行い、2011年11月19日に、第12回人間福祉学会にて基調講演「ヒューマン・ケアと人間観——いのちと暮らしと人生を支える」を行った。

東神戸病院緩和ケア病棟主催によるホスピスボランティア講座にて、第1回（9月24日）「死と向き合うこと」（浜渦）、第4回（10月22日）「患者さんとのかわり方／倫理的配慮」（中岡）、ホスピス講座（12月3日）「ホスピスの歴史と現在～西欧と日本を比べながら～」（浜渦）とそれぞれ講師を務めた。

本間直樹准教授が総合コーディネータをつとめている「中之島哲学コレージュ」も、毎月セミナーと哲学カフェを定期的に「アートエリア B1」にて開催している。また本間直樹准教授は、2011年11月26日に、アートミーツケア学会2011年度京都大会にて、各界からの登壇者による「クロストーク「こども」から考えるケアとアート——大震災を経て」の企画と進行を担当するほか、翌27日、同大会分科会「震災と原発についてのこどもたちとの対話プロジェクト報告」にて、高橋綾、辻明典とともに報告を行った。

大北全俊助教が、2011年1月11日学術講演「病／病者へのまなざし—— F. ナイチンゲール『看護覚え書』をてがかりに考える——」（関西福祉大学附属地域福祉政策研究所主催）に演者として、2011年5月22日第37回日本保健医療社会学会大会（大阪大学）のシンポジウム「疾患対策をめぐるヘルスコミュニケーション」にシンポジストとして参加した。また2011年12月6日に、大阪大学21世紀懐徳堂 i-spot 講座にて「ナイチンゲールの「ものさし」——病と健康について

の思想」の講師をつとめた。同年12月13日に、最先端ときめき推進事業「バイオサイエンスの時代における人間の未来」第26回ときめき☆セミナーで、「HIV感染症対策とバイオポリテイク」という題目で発表を行った。

本年度の講義・演習は以下の通りである。

「臨床哲学ネットワーク11前・後」、「倫理学の研究方法C・D」、「臨床哲学概論11」（以上、中岡、浜渦、本間、大北）、「臨床哲学研究C・D」（中岡、浜渦、本間）、「自己変容の哲学11前・後」「Ethics in English 2011」「ヘーゲル哲学を読みぬく11」（以上、中岡）、「ケアの臨床哲学——人間の誕生とそのケア——」、「フッサール間主観性の現象学のゆくえ」、「ケアの臨床哲学——人間の誕生とそのケアを考える——」、「フッサール間主観性の現象学のゆくえ（外国語文献演習）」（以下、浜渦）、「思考の活動とメディア（6）・（7）」（本間、久保田）、「メルロ＝ポンティの感覚論（1）・（2）」、「哲学的コミュニケーションの探究と実践（1）・（2）」（以上、本間）、「レヴィナスを読む」（家高）、「知識生産の論理と倫理」（小林）。

（大北）